



©Makoto Kamiya



©Ayuset

## 第216回定期演奏会 ロマンティックの神髄

2026年3月21日(土) 13:45開場 14:30開演

指揮/角田鋼亮(音楽監督) ピアノ/阪田知樹\*

丹羽葉月:委嘱新作(世界初演)

マルクス:ロマンティック・ピアノ協奏曲ホ長調\*

チャイコフスキー:交響曲第4番へ短調Op.36

本年もどうぞよろしくお願いいたします。年明け最初、冴えたタクトで作品の生命力をぐいぐい引き出すマエストロ・大井剛史さんをお迎えしている本日の定期演奏会……に続きまして、次回(3月21日)はシーズン最後の定期。〈ロマンティック・セントラル〉をテーマに据えた今季のフィナーレは〈ロマンティックの神髄〉と題して、角田鋼亮音楽監督が指揮台に立ちます。ロシアの詩情を深々と響かせながら駆け抜ける傑作、チャイコフスキーの交響曲第4番をメインに据えて、名古屋出身の大人気ピアニスト・阪田知樹さんをお迎えするコンチェルトでは、阪田さんの一推しだというヨーゼフ・マルクスの秘曲、その名も〈ロマンティック・ピアノ協奏曲〉にどっぴりとひたっていただきます。さらに、地元から羽ばたいた〈いま〉の感性を!愛知県立芸術大学の博士後期課程を修了されてヨーロッパへ留学、才能に磨きをかけている新鋭作曲家・丹羽葉月さんの委嘱新作を世界初演いたします。今を生きる作曲家が〈ロマン〉の先に何を拓くのか……まったく新しい音の誕生に立ち会える瑞々しい時間も、どうぞお楽しみに。

### ◆ロマンティックが全身を震わせる! —— チャイコフスキーの交響曲第4番

ロシアの作曲家ピョートル・チャイコフスキー(1840~93)といえば、今シーズンも昨年6月に交響曲 第6番 短調《悲愴》をお聴きいただきました[第211回定期/マーク・マスト指揮]、翌7月にはマエストロ角田の指揮で幻想序曲《ロミオとジュリエット》もご堪能いただきました。——シーズンのしめくりに、やはり角田音楽監督と共にチャイコフスキーの力作をお聴きいただくのも、円環を閉じるような自然な流れ、と言えましょうか。

次回定期では、交響曲 第4番 へ短調(1877~78年)をお届けします。なにしろ濃厚、全4楽章が深く力強い詩情とそのエネルギーに満ちた傑作シンフォニーですから、セントラル愛知交響楽団の充実をこれでもかと全身で浴びていただくことになります。〈ロマンティック・セントラル〉の旅路、そのフィナーレにふさわしい選曲と言えましょう。

激情に身を震わせ、あるいは陰翳に身を沈め……と激しい起伏から悲劇的な厚みが広がってゆく第1楽章。つづく第2楽章では、哀愁の色濃いメロディを深々と歌い継いでゆく〈歌心〉が絶品です。続く第3楽章では、珍しいことに弦楽セクションがずっと〈ピツィカート奏法〉(弓を持たず、指で弦をはじいて音を出す)で急速なパッセージを奏し続けるという楽しい光景も。そこに入ってくる管楽器のユーモラスな表現にもご注目ですが……最後の第4楽章、ホールの天井も揺れるかという総奏の爆烈は、これはもう空気感をまるごと身体で感じていただきたいものです。

重く暗い運命を宣するようなファンファーレにはじまり、美しい民謡のメロディも引用され……と、激情から甘美への耽溺まで、まさに〈ロマンティック〉の壮大な振幅を実感できる格好の作品。オーケストラの総員がそれこそ火の玉のように疾走するエンディングまで、楽団の全力にご期待ください!

### ◆途方もなく甘美で華麗な、幻の大作 —— マルクス〈ロマンティック・ピアノ協奏曲〉

シーズン最後の定期演奏会にお迎えするゲスト —— 昇龍の勢いで大活躍されている人気ピアニスト・阪田知樹さんは以前、第192回定期演奏会[2022年9月/角田鋼亮指揮]で、モシユコフスキのピアノ協奏曲 ホ長調という大変に珍しい大曲を自ら所望、披露されました。それに続く今回も、これまた珍しい(ますますどっぴり美しい!)力作を引っさげての帰還。20世紀前半、音楽の先鋭に抗してロマンティックな作風を貫き通したオーストリアの作曲家、ヨーゼフ・マルクス(1882~1964)の〈ロマンティック・ピアノ協奏曲〉(1919~20年)です。

当時の音楽界は、いわば革新の時代でした。《春の祭典》など問題作で世を震撼させていたストラヴィンスキーの活躍をはじめ、

シェーンベルクらが〈無調〉や〈十二音技法〉という新しい作曲技法を開拓したり……ロマンティックな音楽へ徹底的に叛旗をひるがえしていたのです。

ところが、そうした流れに頑として抵抗を示した保守派の人たちもいたわけで……そのひとりがヨーゼフ・マルクスでした。主に歌曲の分野で功績を残していますが、自身もたいへん腕の立つピアニストだったようで、この〈ロマンティック・ピアノ協奏曲〉も、独奏パートは華麗な演奏効果に満ち満ちた……ほぼ過剰と申し上げてよいほどにロマンスが溢れかえる大作です。迎えるオーケストラのほうも、往年のハリウッド映画音楽もかくやというゴージャスな(こちらが先ですが)厚みで鳴りわたります。濃厚・甘美・壮麗・耽溺……とロマン度にかけては最高峰を極めた感のある作品です。

独奏ピアノは、並外れた剛腕ピアニストでなければ太刀打ち出来ないレベルの演奏至難。弾ける人があまりに少ないために埋もれてしまった悲運のコンチェルトですが、阪田知樹さんはむしろ本作に選ばれしピアニスト、と言うべき辣腕。彼が満を持して贈る、世にも稀なる本作の実演、お聴き逃しなく!

## ◆新しい力をつかめ! —— ロマンティックという〈武器〉と、その先へ

ところで、ちょっと言葉のお話になりますが……〈ロマンティック〉とは何だったのでしょうか。

辞書をめくると「現実離れた甘美で理想的な雰囲気やなりゆきであるさま。小説、特に恋愛小説の世界のように、甘い情緒や悲壮美に翔んでいるさま。また、その風を好んだり望んだりするさま」(小学館・日本国語大辞典)なんてことが書いてありますが、ヨーロッパ芸術の歴史では、ロマンティックであることは、いつ頃からか〈挑戦〉でもありました。

というのも、中世から長らく〈ロマンティック〉は、あまり良い意味では使われていませんでした。知識人たちの読み書きするラテン語ではなく、庶民たちが語るロマンス語の物語のような……という、俗っぽい陶醉をどこか見下すようなニュアンスが込められていたのだそうです。

ところが、やがて〈ロマンティック〉は反転して武器になります。冷静に、知的に、理性的にものごとを認識するばかりの姿勢に反発して、「夢に身を任せ、空想的・非現実的であって何がいけないのか?」と、開きなおる考え方が生まれてきます。堅苦しい伝統に反発して、理性が見つめる現実のその先へ……夢や幻想の世界に新しい何かを見つけ、つかみ出す。ヨーロッパ各地に、ロマン主義の炎が燃え上がり、古典主義の時代を押し流していったのです。

芸術家たちは、ときに甘美な(ときに妖しく狂おしい)夢想から、新しい創造のエネルギーを汲み上げました。私たちが今シーズンの定期演奏会でたくさん体感してきた、音楽の多種多様な〈ロマンティック〉。時代や地域によって千差万別の成果が(今に至るまで)生まれ続けて来た系譜をたどりながら、オーケストラ芸術がどれほど豊かな広がりを見せているか、実感していただけたかと思います。

その最後を飾る次回定期では、チャイコフスキーやマルクスの〈ロマンティック〉に加えて、気鋭の作曲家・丹羽葉月さんの委嘱新作(世界初演)もお聴きいただきます。

どんな作品になるか筆者も楽しみにしていますが —— 作曲家のコメントをご紹介しますと、「古典派からロマン派への転換(形式美から感情表現へ)の歴史を踏まえた上で、新ロマン主義のさらに次の世代として〈ポスト・新ロマン主義〉をどのように位置づけるかという問いを呈示する。今日の感性的な中で再び照射されるロマン主義のその後を探る試みといえる」とのこと。〈ロマンティック〉の先へ……まさに、今季をしめくる定期にふさわしい新作ではありませんか。ぜひ次回も、このホールでお会いいたしましょう!

### やま の たけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』『音楽の友』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、朝日カルチャーセンター新宿教室での音楽講座、歌詞対訳など多数。

Profile

